五　北条氏政の時代

1　上杉謙信・武田信玄の小田原攻めをはねのける

二十一才で父、氏康のあとをついだ四代目の氏政は、父・氏康とともに上杉軍・武田軍という、東国で大きな力をもっていた強敵に立ち向かいました。

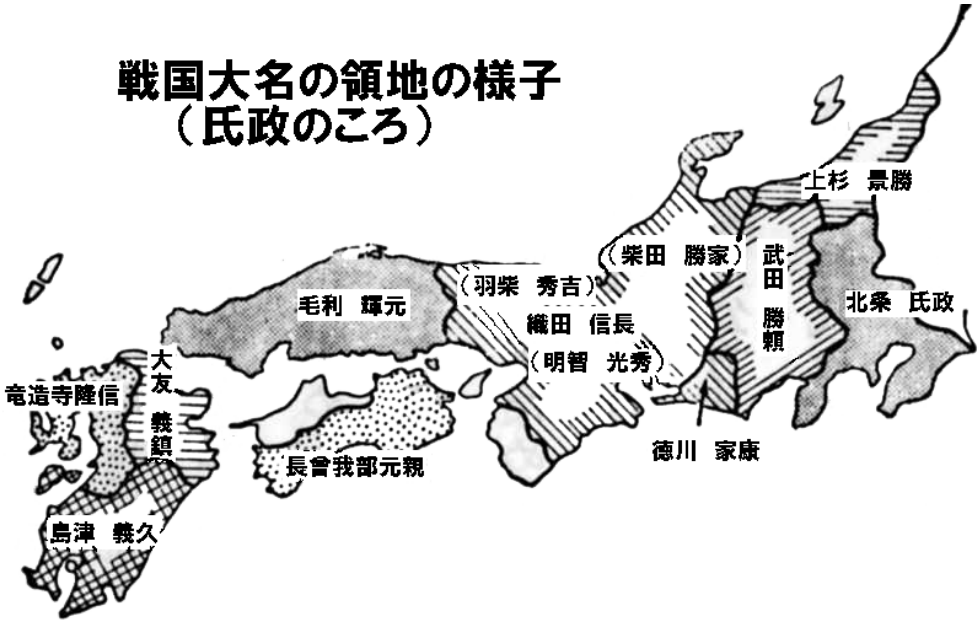
一五六〇年、越後の国（今の新潟県）の上杉謙信が関東に攻めこみました。謙信は関東の北条氏の城を次々と攻め落とし、大軍を率いて相模の国まで押し寄せ、小田原城を取り囲みました。氏康・氏政の親子は、小田原城に立てこもって戦いました。上杉軍は小田原城の蓮池門（幸田門）へ突入しましたが、小田原城の守りがとても固かったため、謙信は小田原城を攻め落とすことをあきらめて、越後の国に帰っていきました。

一五六九年、今度は甲斐の国の武田信玄が関東に攻めこみ、小田原城を取り囲みました。氏康・氏政親子は、今回も城に立てこもって戦いました。武田

軍は小田原城を攻め落とすことは難しいと考え、わずか四日間で小田原から引き上げていきました。

2　有力な武将たちとの同盟

一五七一年に父・氏康が亡くなったあと、氏政は名実ともに北条氏のトップに立ちました。氏政はまず上杉謙信と結んでいた同盟を取りやめ、武田信玄との間に同盟を結びました。氏政は妹を武田信玄のあとつぎである武田勝頼にとつがせ、武田氏との関係をより強くしようとしましたが、勝頼と氏政は、上杉氏のあとつぎ争いの中で対立することになってしまい、北条氏と武田氏の同盟は短いうちに終わってしまいました。



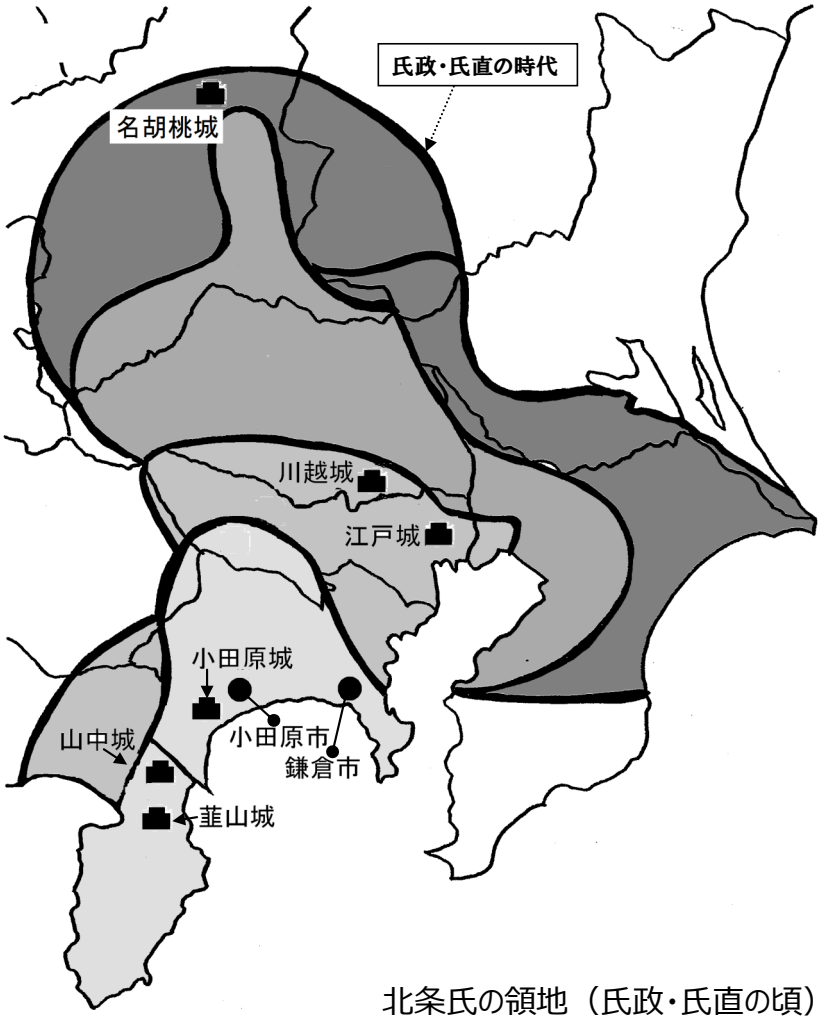
武田氏との同盟が取りやめになったあと、氏政は徳川家康と同盟を結び、さらに、織田信長に従うことにして、武田勝頼に対抗しました。織田信長は徳川家康や氏政たちを従えて勝頼を攻めほろぼしました。

その後、織田信長が本能寺の変で亡くなったことは、多くの武将たちに衝撃を与えました。大きな変化の中で、氏政・氏直の親子は、関東から信濃の国（今の長野県）にまで勢力を広げていきました。信濃では徳川家康と対立したこともありましたが、北条氏と徳川氏の間に戦を起こさないよう取り決めをし、家康は娘の督姫を氏政の息子の氏直にとつがせ、関係をより確かなものにしていきました。のちの小田原合戦まで、徳川氏とのつながりが北条氏の外交の基礎になり、北条氏は広く関東地方を中心に支配を広げることになりました。その時の勢力は、北条氏が治めていた時代の中で、最大となりました。

一五八〇年、氏政は四〇才前後でしたが、子の氏直にあとをつがせることにしました。しかし実際には、氏政はまだ北条氏の中心にいて、氏直とともに政治や軍事をとりしきっていました。

いっぽう、戦国時代の有名な武将である豊臣秀吉はしだいに勢力を強め、天下統一をめざしていました。西日本を平定した秀吉は、次の目標を関東に定め、小田原にもせまってきました。

秀吉との戦いはどんな様子だったのでしょうか。そして、どのように北条氏は小田原城を去っていったのでしょうか。



北条氏の領地（氏政・氏直の頃）